

シグナルとシグナレス

宮沢賢治

青空文庫

「ガタンコガタンコ、シユウフツフツ、

さそりの赤眼あかめが見えたころ、

四時けさから今朝も やつて来た。

遠野とおのの盆地ぼんちは まつくらで、

つめたい水の 声ばかり。

ガタンコガタンコ、シユウフツフツ、

凍こごえた砂利じゃりに 湯ゆげを吐はき、

火花やみを闇やみに まきながら、

蛇紋岩サアペンテインの 崖がけに来て、

やつと東が 燃もえだした。

ガタンコガタンコ、シユウフツフツ、

鳥がなきだし 木は光り、

青々川は ながれたが、

丘おかもはざまも いちめんおに、

まぶしい霜しもを 載のせていた。

ガタンコガタンコ、シユウフツフツ、

やっぱりかけると あったかだ、

僕ぼくはほうほう 汗あせが出る。

もう七、八里り はせたいな、

今日も一日 霜ぐもり。

「ガタンガタン、ギー、シユウシユウ」

軽便鉄道けいべんてつどうの東からの一番列車れっしやが少しあわてたように、この歌いながらやって来てとまりました。機関車きかんしやの下からは、力のない湯げゆが逃げ出しにて行き、ほそ長いおかしな形の煙突えんとつからは青いけむりが、ほんの少うし立ちました。

そこで軽便鉄道づきの電信柱でんしんばしらどもは、やっと安心あんしんしたように、ぶんぶんとうなり、シグナルの柱はかたんと白い腕木うできを上げました。このまつすぐなシグナルの柱は、シグナレスでした。

シグナレスはほつと小さなため息いきをついて空を見上げました。空にはうすい雲しほが縞しまになっていつぱいに充ちみ、それはつめたい白しろろびかりろびかり光ひかりを凍こおった地面じめんに降ふらせながら、しずかに東ながに流ながれていたの

です。

シグナレスはじつとその雲の行く方ゆえをながめました。それからやさしい腕木を思い切りそつちの方へ延のばしながら、ほんのかすかに、ひとりごとを言いいました。

「今朝けさは伯母おばさんたちもきつとこつちの方を見ていらつしやるわ」
シグナレスはいつまでもいつまでも、そつちに氣をとられておりました。

「カタン」

うしろの方のしずかな空で、いきなり音がしましたのでシグナレスは急いそいでそつちをふり向むきました。ずうつと積つまれた黒い枕まくらぎ木の向むこうに、あの立派りっぱな本線ほんせんのシグナル柱ばしらが、今はるか

南から、かがやく白けむりをあげてやって来る列車れっしゃを迎えるために、その上の硬い腕かたうでを下けたところでした。

「お早う今朝は暖かあたたかですね」本線のシグナル柱は、キチンと兵隊へいたのように立ちながら、いやにまじめくさってあいさつしました。

「お早うございます」シグナレスはふし目になって、声を落おとして答えこたえました。

「若さまわか、いけません。これからはあんなものにやたらに声を、おかけなさらぬようにねがいます」本線のシグナルに夜電氣よでんを送る太い電でん信しん柱ばしらがさももつたいぶつて申もうしました。

本線のシグナルはきまり悪わるそうに、もじもじしてだまってしま

いました。気の弱いシグナレスはまるでもう消えてしまいか飛んでしまふかかしたかと思ひました。けれどもどうにもしかたがありませんでしたから、やつぱりじつと立っていたのです。

雲の縞は薄い琥珀の板のようにうるみ、かすかなかすかな日光が降つて来ましたので、本線シグナルつきの電信柱はうれしがつて、向こうの野原を行く小さな荷馬車を見ながら低い調子はずれの歌をやりました。

「ゴゴン、ゴーゴー、

うすい雲から

酒が降りだす、

酒の中から

霜しもがながれる。

ゴゴン、ゴーゴー、

ゴゴン、ゴーゴー、

霜がとければ、

つちはまっくろ。

馬はふんごみ、

人もペちやペちや。

ゴゴン、ゴーゴー」

それからもつともつとつづけざまに、わけのわからないことを

歌いました。

その間に本線のシグナル柱が、そつと西風にたのんでこう言
いました。

「どうか気にかけないでください。こいつはもうまるで野蠻なん
です。礼式も何も知らないのです。実際私はいつでも困つて
るんですよ」

軽便鉄道のシグナレスは、まるでどぎまぎしてうつむきな
がら低く、

「あら、そんなことございませぬわ」と言いましたがなにぶん風
下でしたから本線のシグナルまで聞こえませんでした。

「許してくださいるんですか。本当を言ったら、僕なんかあなたに

怒おこられたら生きているかいもないんですからね」

「あらあら、そんなこと」軽便鉄道の木でつくったシグナレスは、まるで困こまったというように肩かたをすぼめました。実はその少しうじつつむいた顔は、うれしさにぽつと白しろびかり光を出していました。

「シグナレスさん、どうかまじめで聞いてください。僕あなたのためなら、次つぎの十時の汽車が来る時腕うでを下げないで、じつとがんばり通してでも見せますよ」わずかばかりヒュウヒュウ言いつていた風が、この時ときびたりとやみました。

「あら、そんな事こといけませんわ」

「もちろんいけないですよ。汽車が来る時、腕を下げないでがんばるなんて、そんなことあなたのためにも僕のためにもならない

から僕はやりはしませんよ。けれどもそんなことでもしようと言
うんです。僕あなたくらい大事だいじなものは世界中せかいじゅうないんです。ど
うか僕を愛あいしてください」

シグナレスは、じつと下の方を見て黙だまつて立っていました。本
線シグナルつきのせいの低いひく電信柱でんしんばしらは、まだでたらめの歌を
やっています。

「ゴゴンゴーゴ、

やまのいわやで、

熊くまが火をたき、

あまりけむくて、

ほらを逃にげ出す。ゴゴンゴー、

田螺にしはのろのろ。

うう、田螺はのろのろ。

田螺のしゃつぽは、

羅紗ラシャの上じょうとう等、ゴゴンゴーゴー」

本線ほんせんのシグナルはせっかちでしたから、シグナレスの返事へんじのないのに、まるであわててしまいました。

「シグナレスさん、あなたはお返事をしてくださらないんですか。ああ僕ぼくはもうまるでくらやみだ。目の前がまるでまっ黒な淵ふちのようだ。ああ雷かみなりが落ちて来て、一ぺんに僕のからだをください。足も

とから噴火が起こつて、僕を空の遠くにほうりなげろ。もうなにもかもみんなおしまいだ。雷が落ちて来て一ぺんに僕のからだを砕け。足もと……」

「いや若様、雷が参りました節は手前一身におんわざわいをちようだいいいたします。どうかご安心をねがひとう存じます」

シグナルつきの電信柱が、いつかでたらめの歌をやめて、頭の上のはりがねの槍をぴんと立てながら眼をパチパチさせていました。

「えい。お前なんか何を言うんだ。僕はそれどこじやないんだ」
 「それはまたどうしたことでござりまする。ちよつとやつがれま
 でお申し聞けになりとう存じます」

「いいよ、お前はだまっておいで」

シグナルは高く叫びました。しかしシグナルも、もうだまってしまいました。雲がだんだん薄くなって柔らかな陽が射して参りました。

五日の月が、西の山脈の上の黒い横雲から、もう一ぺん顔を出して、山に沈む前のほんのしばらくを、鈍い鉛のような光で、そこらをいっぱいにしました。冬がれの木や、つみ重ねられた黒い枕木はもちろんのこと、電信柱までみんな眠ってしまいました。遠くの遠くの風の音か水の音がごとと鳴るだけです。「ああ、僕はもう生きてるかいもないんだ。汽車が来るたびに腕

を下げたり、青い眼鏡めがねをかけたがりいつたいなんのためになんことをするんだ。もうなんにもおもしろくない。ああ死しのう。けれどもどうして死ぬ。やっぱかみなり雷ふんかか噴火だ」

本線ほんせんのシグナルは、今夜も眠ねむられませんでした。非常ひじょうなはんもんでした。けれどもそれはシグナルばかりではありません。枕木の向こうに青白くしよんぼり立つて、赤い火をかかっている軽便鉄道けいべんてつどうのシグナル、すなわちシグナレスとても全まったくそのとおりでした。

「ああ、シグナルさんもあんまりだわ、あたしが言いえないでお返へ事もできないのを、すぐあんなに怒おこっておしまいになるなんて。あたしもう何もかもみんなおしまいだわ。おお神様かみさま、シグナル

さんに雷かみなりを落おとす時、いつしよに私にもお落としく下さいませ」
こう言いって、しきりに星空ほしぞらに祈いのっているのです。ところがその声こゑが、かすかにシグナルの耳みみにはいりました。シグナルはぎよつとしたように胸むねを張はって、しばらく考えていましたが、やがてガタガタふるえだしました。

ふるえながら言いいました。

「シグナレスさん。あなたは何なにを祈いのっておられますか」

「あたし存ぞんじませんわ」シグナレスは声を落おとして答こたえました。

「シグナレスさん、それはあんまりひどいお言葉ことばでしょう。僕ぼくはもう今いますぐでもお雷らいさんにつぶされて、または噴火ふんかを足あしもとから引ひっぱり出して、またはいさぎよく風かぜに倒たおされて、またはノアの

洪水こうずいをひつかぶって、死しんでしまおうと言うんですよ。それだのに、あなたはちつとも同情どうじょうしてくださらないんですか」

「あら、その噴火や洪水こうずいを。あたしのお祈りはそれよ」シグナレスは思い切つて言いました。シグナルはもううれしくて、うれしくて、なおさらガタガタガタふるえました。

その赤い眼鏡めがねもゆれたのです。

「シグナレスさん、なぜあなたは死ななければならぬんですか。ね。僕ぼくへお話お話ししてください。ね。僕へお話お話ししてください。きつと、僕はそのいけないやつを追おっぱらつてしまえますから、いったいどうしたんですね」

「だって、あなたがあんなにお怒おこりなさるんですもの」

「ふふん。ああ、そのことですか。ふん。いいえ。そのことならばご心配しんぱいありません。大丈夫だいじょうぶです。僕ちつとも怒つてなんかいはしませんからね。僕、もうあなたのためなら、眼鏡めがねをみんな取られて、腕うでをみんなひっぱなされて、それから沼ぬまの底そこへたたき込まれたって、あなたをうらみはしませんよ」

「あら、ほんとう。うれしいわ」

「だから僕を愛あいしてください。さあ僕を愛するって言うてください
い」

五日のお月さまは、この時雲と山の端はとのちようどまん中にいました。シグナルはもうまるで顔色を変かえて灰色はいいろの幽霊ゆうれいみた
いになって言いました。

「またあなたはだまってしまったんですね。やっぱ僕がきらいなんでしょう。もういいや、どうせ僕なんか噴火か洪水か風かにやられるにきまつてるんだ」

「あら、ちがいますわ」

「そんならどうですどうです、どうです」

「あたし、もう大昔おおむかしからあなたのことばかり考えていましたわ」

「本当ですか、本当ですか、本当ですか」

「ええ」

「そんならいいでしょう。結婚けっこんの約束やくそくをしてください」

「でも」

「でもなんですか、僕たちは春になったら燕つばめにたのんで、みんなにも知らせて結婚けっこんの式しきをあげましょう。どうか約束やくそくしてください」

「だってあたしはこんなつまらないんですわ」

「わかってますよ。僕にはそのつまらないところが尊とうといんです」
すると、さあ、シグナレスはあらんかぎりの勇氣ゆうきを出して言い出しました。

「でもあなたは金でできてるでしょう。新式しんしきでしょう。赤青眼あかあおめが鏡ねを二組みも持もっていらっしやるわ、夜も電燈でんとうでしょう。あたしは夜だってランプですわ、眼鏡もただ一つきり、それに木ですわ」

「わかってますよ。だから僕はすきなんです」

「あら、ほんとう。うれしいわ。あたしお約束するわ」

「え、ありがとう、うれしいなあ、僕もお約束しますよ。あなたはきつと、私の未来の妻だ」

「ええ、そうよ、あたし決して変わらないわ」

「結婚指環をあげますよ、そら、ね、あすこの四つならんだ青い星ね」

「ええ」

「あのいちばん下の脚もとに小さな環が見えるでしょう、環」

「あ、星雲ですよ。あの光の環ね、あれを受け取ってください。」

「僕のまごころです」

「ええ。ありがとう、いただきますわ」

「ワツハツハ。大笑おおわらいだ。うまくやってやがるぜ」

突然とつぜん向むこうのまつ黒な倉庫そうこが、空にもはばかるような声でどなりました。二人はまるでしんとなくなってしまいました。

ところが倉庫がまた言いいました。

「いや心配しんぱいしなさんな。この事ことは決けつしてほかへはもらしませんぞ。わしがしつかりのみ込こみました」

その時です、お月さまがカブンと山へおはいりになって、あたりがポカツと、うすぐらくなつたのは。

今は風があんまり強いので電でん信しん柱ぼしらどもは、本線ほんせんの方も、
軽便けいべん鉄道てつどうの方もまるで気が気でなく、ぐうん　ぐうん　ひゅ

うひゆう と独樂こまのようになつておりました。それでも空はまつ青さおに晴れていました。

本線シグナルつきの太ふとつちよの電信柱も、もうでたらめの歌をやるどころの話ではありません。できるだけからだをちぢめて眼めを細ほそくして、ひとなみに、ブウウ、ブウウとなつてごまかしておりました。

シグナレスはこの時、東のぐらぐらするくらい強い青びかりの中を、びっこをひくようにして走つて行く雲を見ておりましたが、それからチラツとシグナルの方を見ました。シグナルは、今日は巡査じゆんさのようでんちゆうにしゃんと立っていましたでんちゆうが、風が強くて太つちよの電柱でんちゆうに聞こえないのでんちゆうをいいことにして、シグナレスに話し

かけました。

「どうもひどい風ですね。あなた頭がほてって痛みはしませんか。どうも僕は少しくらくらしますね。いろいろお話ししますから、あなたただ頭をふつてうなずいてだけいてください。どうせお返^へ事^じをしたつて僕^{ぼく}のところへ届^{とど}きはしませんから、それから僕の話^わでおもしろくないことがあつたら横^{よこ}の方に頭を振^ふってください。これは、本当は、ヨーロッパの方のやり方なんですよ。向^むこうでは、僕たちのように仲^{なか}のいいものがほかの人に知れないようにお話をする時は、みんなこうするんですよ。僕それを向^むこうの雑^{ざつ}誌^しで見^みたんです。ね、あの倉庫^{そうこ}のやつめ、おかしなやつですね、いきなり僕たちの話してるところへ口を出して、引き受^うけたのなん

のつて言うんですもの、あいつはずいぶん太ふとってますね、今日も眼めをパチパチやらかしてますよ、僕のあなたに物を言ってるのはわかっていても、何を言ってるのか風でいっこう聞こえないんですよ、けれども全ぜん体たい、あなたに聞こえてるんですか、聞こえてるなら頭を振ってください、ええそう、聞こえるでしょうね。僕たち早く結けっ婚こんしたいもんですね、早く春になれあいんですね、僕のところのぶつきりに少しも知らせないでおきましょう。そしておいて、いきなり、ウヘン！ ああ風でのどがぜいぜいする。ああひどい。ちよつとお話をやめますよ。僕のどが痛いたくなつたんです。わかりましたか、じゃちよつとさようなら」

それからシグナルは、ううううと言いなから眼をぱちぱちさせ

て、しばらくの間だまっていた。

シグナレスもおとなしく、シグナルののどのなおるのを待^まっていました。電信柱^{でんしんぼしら}どもはブンブンゴンゴンと鳴り、風はひゅうひゅうとやりました。

シグナルはつばをのみこんだり、ええ、ええとせきばらいをしたりしていましたが、やつとのどの痛^{いた}いのがなおつたらしく、もう一ぺんシグナレスに話しかけました。けれどもこの時は、風がまるで熊^{くま}のように吼^ほえ、まわりの電信柱^{でんしんぼしら}どもは、山いっばいの蜂^{はち}の巣^すをいっぺんにこわしでもしたように、ぐわんぐわんとうなっていましたので、せつかくのその声も、半分ばかりしかシグナレスに届^{とど}きませんでした。

「ね、僕はもうあなたのためなら、次の汽車の来る時、がんばって腕うでを下げないことでも、なんでもするんですからね、わかつたでしょう。あなたもそのくらいの決心けっしんはあるでしょうね。あなたはほんとうに美しいんです、ね、世界せかいの中うちにだっておれたちの仲間なかまはいくらもあるんでしょう。その半分はまあ女の人でしょうがねえ、その中であなたはいちばん美しいんです。もつともほかの女の人僕よく知らないんですけれどね、きつとそうだと思っんですよ、どうです聞こえますか。僕たちのまわりにいるやつはみんなばかですね、のろまです、僕のとこのぶつきりが僕が何をあなたに言ってるのかと思つて、そらごらんなさい、一生けん命めい、目をパチパチやってますよ、こいつとききたら全くまったチヨークよ

りも形がわるいんですからね、そら、こんどはあんなに口を曲まげていますよ。あきれたばかりですねえ、僕の話聞こえますか、僕の

……」

「若わかさま、さつきから何をべちやべちや言いっていらっしやるのです。しかもシグナレス風情ふぜいと、いったい何をにやけていらっしやるんです」

いきなり本線ほんせんシグナルつきの電でん信しん柱ばしらが、むしやくしやまぎれに、ごうごうの音の中を途方とほうもない声でどなったもんですから、シグナルはもちろんシグナレスも、まっ青さおになつてぴたっことつちへ曲まげていたからだを、まっすぐに直なおしました。

「若わかさま、さあおっしやい。役目やくめとして承うけたまわらなければなりません」

シグナルは、やっと元氣を取り直なおしました。そしてどうせ風のために何を言いつても同じことなのをいいことにして、

「ばか、僕ぼくはシグナレスさんと結けっこん婚こんして幸こうふく福ふくになつて、それからお前にチヨークのお嫁よめさんをくれてやるよ」と、こうまじめな顔で言つたのでした。その声は風かざしも下のシグナレスにはすぐ聞こえましたので、シグナレスはこわいながら思わず笑わらつてしまいました。さあそれを見た本ほんせん線せんシグナルつきの電信柱おこしの怒おこりようと言つたらありません。さつそくブルブルツとふるえあがり、青のほく逆さか上あせてしまい唇くちびるをきつとかみながらすすぐひどく手をまわして、すなわち一ぺん東京まで手をまわして風かざしも下したにいる軽けい便べんてつ

鉄てつ道の電信柱どうに、シグナルとシグナレスの対たい話わがいつたいたいなん

だったか、今シグナレスが笑ったことは、どんなことだったかたずねてやりました。

ああ、シグナルは一生の失策しっさくをしたのでした。シグナレスよりも少し風下にすてきに耳のいい長い長い電信柱がいて、知らん顔をしてすまして空の方を見ながらさつきからの話をみんな聞いていたのです。そこでさつそく、それを東京を経て本線シグナルつきの電信柱へんじに返事へんじをしてやりました。本線シグナルつきの電信柱ほんせんはキリキリ齒はがみをしながら聞いていましたんしんぼしらが、すつかり聞いてしまうと、さあ、まるでほかのようになってどなりました。

「くそつ、えいつ。いまましい。あんまりだ。犬畜生いぬちくしょう、あ

んまりだ。犬畜生、ええ、若さま、わたしだつて男ですぜ。こんにひどくばかにされてだまつているとお考えですか。結婚だなんてやれるならやつてごらんなさい。電信柱の仲間なかまはもうみんな反対はんたいです。シグナル柱の人たちだつて鉄道長てつどうちやうの命令めいれいにそむけるもんですか。そして鉄道長はわたしの叔父おじですぜ。結婚なりなんなりやつてごらんなさい。えい、犬畜生いぬちくしょうめ、えい」

本線シグナルつきの電信柱は、すぐ四方に電報でんぽうをかけました。それからしばらく顔色かを変えて、みんなの返事へんじをきいていました。確かにみんなから反対はんたいの約束やくそくをもらったらしいのでした。それからきつと叔父のその鉄道長とかにもうまく頼たのんだにちがいません。シグナルもシグナレスも、あまりのことに今さらポカ

ンとしてあきれていました。本線シグナルつきの電信柱は、すっかり反対の準備じゆんびができると、こんどは急に泣きき声ゆうで言ないました。

「あああ、八年の間、夜ひる寝ねないでめんどろを見てやってそのお礼れいがこれか。ああ情なさけない、もう世の中はみだれてしまった。

ああもうおしまいだ。なさけない、メリケン国のエジソンさまもこのあさましい世界せかいをお見すてなされたか。オンオンオン、ゴゴンゴゴゴゴンゴ

風はますます吹ふきつのも、西の空が変へんに白くぼんやりなつて、どうもあやしいと思おもっているうちに、チラチラチラチラとうとう雪ゆきがやって参まいりました。

シグナルは力を落おとして青白く立ち、そつとよこ眼めでやさしい

シグナレスの方を見ました。シグナレスはしくしく泣きながら、ちようどやって来る二時の汽車を迎えるためにしよんぼりと腕をさげ、そのいじらしいなで肩はかすかにかすかにふるえておりました。空では風がフイウ、涙を知らない電信柱どもはゴゴンゴゴゴンゴゴンゴ。

さあ今度は夜ですよ。シグナルはしよんぼり立っております。月の光が青白く雲を照らしています。雲はこうこうと光ります。そこにはすきとおつて小さな紅火や青の火をうかべました。しいんとしています。山脈は若い白熊の貴族の屍体のようにしずかに白く横たわり、遠くの遠くを、ひるまの風のなごりがヒュ

ウと鳴^なつて通りました。それでもじつにしずかです。黒い枕^{まくら}木^ぎはみな眠^{ねむ}り、赤の三角^{さんかく}や黄色の点々、さまざまの夢^{ゆめ}を見ている時、若いあわれなシグナルはほつと小さなため息^{いき}をつきました。そこで半分凍^こえてじつと立っていたやさしいシグナレスも、ほつと小さなため息をしました。

「シグナレスさん、ほんとうに僕^{ぼく}たちはつらいねえ」

「たまらずシグナルがそつとシグナレスに話しかけました。

「ええ、みんなあたしがいけなかったのですわ」シグナレスが青じろくうなだれて言^いいました。

諸^{しよ}君^{くん}、シグナルの胸^{むね}は燃^もえるばかり、

「ああ、シグナレスさん、僕たちたった二人だけ、遠くの遠くの

みんなのいないところに行つてしまいたいね」

「ええ、あたし行けさえするなら、どこへでも行きますわ」

「ねえ、ずうつとずうつと天上にあの僕^{ぼく}たちの婚約指環^{エンゲージリング}より

も、もっと天上に青い小さな小さな火が見えるでしょう。そら、ね、あすこは遠いですねえ」

「ええ」シグナレスは小さな唇^{くちびる}で、いまにもその火にキツスした

そうに空を見あげていました。

「あすこには青い霧^{きり}の火が燃^もえているんでしようね。その青い霧の火の中へ僕たちいっしょにすわりたいですねえ」

「ええ」

「けれどあすこには汽車はないんですねえ、そんなら僕^ぼ畑^{はたけ}をつく

ろうか。何か働かないといけないんだから」

「ええ」

「ああ、お星さま、遠くの青いお星さま、どうか私どもをとつて
ください。ああなさけぶかいサンタマリヤ、まためぐみふかいジ
ョウジ スチブンソンさま、どうか私どものかなしい祈りを聞いて
ください」

「ええ」

「さあいつしよに祈りましょう」

「ええ」

「あわれみふかいサンタマリヤ、すきとおる夜の底、つめたい雪
の地面の上になしくいのるわたくしどもをみそなわせ、めぐみ

ふかいジヨウジ スチブンソンさま、あなたのしもべのまたしもべ、かなしいこのたましいの、まことの祈りをみそなわせ、ああ、サンタマリヤ」

「ああ」

星はしずかにめぐって行きました。そこであの赤眼あかめのさそりが、せわしくまたたいて東から出て来、そしてサンタマリヤのお月さまが慈愛じあいにみちた尊とうとい黄金きんのまなざしに、じつと二人を見ながら、西のまっくろの山におはいりになった時、シグナル、シグナレスの二人は、祈りにつかれてもう眠ねむっていました。

こんど
今度はひるまでです。なぜなら夜よる昼ひるはどうしてもかわるがわる

ですから。

ぎらぎらのお日さまが東の山をのぼりました。シグナルとシグナレスはぱつと桃色ももいろに映はえました。いきなり大きな幅はば広い声ひろがそこらじゆうにはびこりました。

「おい。本線ほんせんシグナルつきの電信柱でんしんばしら、おまえの叔父おじの鉄てつど道うちよう長ちやうに早くそう言いって、あの二人はいつしよにしてやった方がよかろうぜ」

見るとそれは先ごろの晩ばんの倉庫そうこの屋根やねでした。倉庫の屋根は、赤いうわぐすりをかけた瓦かわらを、まるで鎧よろいのようにキラキラ着き込んで、じろつとあたりを見まわしているのです。

本線シグナルつきの電信柱は、がたがたとふるえて、それか

らじつと固かたくなつて答えました。

「ふん、なんだと、お前はなんの縁故えんこでこんなことに口を出すんだ」

「おいおい、あんまり大きなつらをするなよ。ええおい。おれは縁故と言いえば大縁故さ、縁故でないといえば、いつこう縁故でもなんでもないぜ、が、しかしさ、こんなことにはてめえのようなへん変ちきりんはあんまりいろいろ手を出さない方が結けつきよく局よくてめえのためだろうぜ」

「なんだと。おれはシグナルの後見人こうけんじんだぞ。鉄道長の甥おいだぞ」

「そうか。おい立派りっぱなもんだなあ。シグナルさまの後見人で鉄道長の甥おいかい。けれどもそんならおれなんてどうだい。おれさまは

な、ええ、めくらとんびの後見人、ええ風引きの脈みやくの甥なまこだぞ。どうだ、どつちが偉えらいい」

「何をつ、コリツ、コリコリツ、カリツ」

「まあまあそう怒おこるなよ。これは冗じょうだん談だんさ。悪く思わんでくれ。

な、あの二人さ、かあいそうだよ。いいかげんにまとめてやれよ。

おとな大人おとならしくもないじやないか。あんまり胸むねの狭せまいことは言わんで

さ。あんな立派りっぱな後見人こうけんじんを持って、シグナルもほんとうにしあ

わせだと言いわれるぜ。まとめてやれ、まとめてやれ」

ほんせん 本線ほんせんシグナルしぐなるときの電でん信しん柱ばしらは、物ものを言いおうとしたのでし

たが、もうあんまり気が立たってしまつてパチパチパチな鳴なるだ

けでした。倉庫そうこの屋根やねもあんまりのその怒こりように、まさかこん

なはずではなかったと言うように少しあきれて、だまってその顔を見ていました。お日さまはずうつと高くなり、シグナルとシグナレスとはほつとまたため息をついてお互いに顔を見合わせました。シグナレスは瞳を少し落とし、シグナルの白い胸に青々と落ちた眼鏡の影をチラツと見て、それからにわかにも目をそらして自分のあしもとをみつめ考え込んでしまいました。

今夜は暖かです。

霧がふかくふかくこめました。

その霧を徹して、月のあかりが水色にしずかに降り、電信柱も枕木も、みんな寝しずまりました。

シグナルが待つていたようにほつと息をしました。シグナレスも胸むねいっぱいのおもいをこめて、小さくほつといきしました。

その時シグナルとシグナレスとは、霧の中から倉庫の屋根の落ちついた親切らしい声の響ひびいて来るのを聞きました。

「お前たちは、全まったくきのどくだね、わたしたちは、今朝うまくやってやろうと思つたんだが、かえつていけなくしてしまつた。ほんとにきのどくなことになつたよ。しかしわたしには、また考かんえがあるから、そんなに心しん配ぱいしないでもいいよ。お前たちは霧きりでお互たがいに顔も見えずさびしいだろう」

「ええ」

「ええ」

「そうか、ではおれが見えるようにしてやろう。いいか、おれのあとについて二人いっしょにまねをするんだぜ」

「ええ」

「そうか。ではアルファー」

「アルファー」

「ビーター」 「ビーター」

「ガムマー」 「ガムマーアー」

「デルター」 「デルターアーアアア」

実に不思議じつふしぎです。いつかシグナルとシグナレスとの二人は、まっ黒な夜の中に肩かたをならべて立っていました。

「おや、どうしたんだらう。あたり一面いちめんまっ黒びろうどの夜だ」

「まあ、不思議ふしぎですわね。まっくらだわ」

「いいや、頭の上が星でいっぱいです。おや、なんとという大きな強い星なんだろう。それに見たこともない空の模様もようではありませんか、いったいあの十三連れんなる青い星はどこにあったのでしょうか、こんな星は見たことも聞いたこともありませんね、僕ぼくたちぜんたいどこに來たんでしょうね」

「あら、空があんまり速はやくめぐりますわ」

「ええ、ああ、あの大きな橙だいだいの星は地平線ちへいせんから今上ります。おや、地平線じゃない。水平線なみせんかしら。そうです。ここは夜の海の渚なみせですよ」

「まあ奇麗きれいだわね、あの波なみの青びかり」

「ええ、あれは磯波いそなみの波がしらです、立派りっぱですねえ、行ってみましょう」

「まあ、ほんとうにお月さまのあかりのような水よ」

「ね、水の底に赤いひとでがいますよ。銀水ぎんいろのなまこがいますよ。ゆっくりゆっくり、這はつてますねえ、それからあのユラユラ青びかりの棘とげを動かしているのは、雲丹うにですね。波が寄せよせて来ます。少し遠のきましよう」

「ええ」

「もう、何べん空がめぐったでしょう。たいへん寒さむくなりました。海うみがなんだか凍こったようですね。波はもう、うたなくなりました」

「波なみがやんだせいでしょうかしら。何か音がしていますわ」

「どんな音」

「そら、夢ゆめの水車のきしりのような音」

「ああそうだ。あの音だ。ピタゴラス派はの天球運動てんきゅううんどうの諧音かいおんです」

「あら、なんだかまわりがぼんやり青白くなってきましたわ」

「夜が明けるのでしょうか。いやはてな。おお立派りっぱだ。あなたの顔がはつきり見える」

「あなたもよ」

「ええ、とうとう、僕ぼくたち二人きりですね」

「まあ、青白い火が燃もえてますわ。まあ地面じめんと海も。けど熱あつくないわ」

「ここは空ですよ。これは星の中の霧きりの火ですよ。僕たちのねがいがかなくなったんです。ああ、さんたまりや」

「ああ」

「地球ちぎゆうは遠いですね」

「ええ」

「地球はどっちの方でしょう。あたりいちめんの星、どこがどこかももうわからない。あの僕のブツキリコはどうしたろう。あいつは本当はかあいそうですね」

「ええ、まあ、火が少し白くなったわ、せわしく燃えますわ」

「きつと今秋ですね。そしてあの倉庫そうこの屋根やねも親切でしたね」

「それは親切とも」いきなり太い声ふとがしました。気がついてみる

と、ああ、二人ともいつしよに夢を見ていたのです。いつか霧きりがはれてそら一めんの星が、青や橙だいだいやせわしくせわしくまたたき、向むこうにはまつ黒な倉庫そうこの屋根やねが笑わらいながら立たっておりました。

二人はまたほつと小さな息いきをしました。

青空文庫情報

底本：「セロ弾きのゴーシュ」角川文庫、角川書店

1957（昭和32）年11月15日初版発行

1967（昭和42）年4月5日10版発行

1993（平成5）年5月20日改版50版発行

初出：「岩手毎日新聞」

1923（大正12）年5月

入力：土屋隆

校正：田中敬三

2008年3月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

シグナルとシグナレス

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>